



ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルト
Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)



クラリネット協奏曲 イ長調 KV622

Clarinet Concerto in A major, KV622

1 オープニング

Opening

2 第1楽章 アレグロ

I .Allegro

[12:38]

3 第2楽章 アダージョ

II .Adagio

[08:17]

4 第3楽章 ロンド アレグロ

III .Rondo. Allegro

[09:02]

ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団 Wiener Philharmoniker

クラリネット: ベーター・シュミードル Clarinet : Peter Schmidl

指揮: レナード・バーンスタイン Conducted by Leonard Bernstein

監督: ハンフリー・バートン Directed by Humphrey Burton

収録: 1987年 ウィーン、コンツェルトハウス Konzerthaus Wien 1987

●バーンスタインとクラリネット

山田 治生

バーンスタインの人生においてクラリネットは大きな意味を持つ存在であったに違いない。

無名時代のバーンスタインが最初に出版した作品が、1942年に書き上げた「クラリネット・ソナタ」であった。1942年4月にデイヴィッド・グレイザーのクラリネット、バーンスタインのピアノによってボストンで初演されたこのソナタは、その年の夏にバーンスタインが親しくなったクラリネット奏者のデイヴィッド・オッペンハイムに献呈されている。そして、オッペンハイムとバーンスタインは翌1943年11月にこの作品を録音した。バーンスタインのクラリネット・ソナタは、2つの楽章からなる10分ほどの小さな曲ではあるが、彼の代表的な室内楽作品として、現在に至るまで、ストルツマンやメイエなどのクラリネット奏者によって録音されている（ヨーヨー・マのようにチェロ編曲版を録音している奏者さえいる）。

次のクラリネットとの大きな関わりは、バーンスタインの代表的なジャズ・ピースである「プレリュード、フーガとリフ」。この作品は、ウディ・ハーマンの委嘱を受けて1949年に作曲されたが、ハーマン楽団の事情で初演されないまま放置されてしまった。結局、初演は、1955年、テレビ番組「オムニバス」の「ジャズの世界」の回のなかで行われた。そのとき、バーンスタイン自身がバンドを指揮し、ペニー・グッドマンがクラリネットのソロを吹いた。バーンスタインとグッドマ

ンは、1940年代から親交があり、この作品の初演（蘇演）をすすめたのは、ベニー・グッドマンだったといわれている。

そして、時が流れて1988年。バーンスタインはウィーン楽友協会大ホールでウィーン・フィルのメンバーを相手にこの「プレリュード、フーガとリフ」を指揮している（ライヴ映像が残っている）。もちろんそこでクラリネットのソロを受け持ったのは、ペーター・シュミードルであった。シュミードルを筆頭にウィーン・フィルのメンバーがジャズ・ピースを演奏する前代未聞の出来事は、バーンスタインとウィーン・フィルの絆の強さを示すものにほかならなかった。

その「プレリュード、フーガとリフ」の演奏の1年前にあたる1987年に、シュミードルとバーンスタインはこのDVDに収められているモーツアルトのクラリネット協奏曲の演奏を行った。バーンスタインのウィーン・デビュー当時からウィーン国立歌劇場のクラリネット奏者を務め、長くウィーン・フィルのソロ奏者としてバーンスタインの信頼を得ていたシュミードルが、バーンスタインの指揮するモーツアルトのクラリネット協奏曲のソリストに選ばれたのは当然の成り行きであったといえるだろう。モーツアルトがウィーン宮廷楽団員のアントン・シュタードラーのために書いたこの協奏曲を演奏するのに、祖父、父ともにウィーン・フィルのクラリネット奏者であり、ウィーンのクラリネット奏法の伝統を引き継ぐシュミードルほどふさわしい奏者はいない。

そして1989年、バーンスタインはニューヨーク・フィルの首席クラリネット奏者、スタンリー・ドラッカーとコーポランドのクラリネット協奏曲をライヴ録音した。1949年に19歳でニューヨーク・フィルに入団し、1960年から首席奏者を

務めたドラッカーは、バーンスタイン時代のニューヨーク・フィルを支えた名手である。バーンスタインの親友であったコーポランドの協奏曲の録音に、バーンスタインがドラッカーを指名したのも当然だった。

1987年のウィーンでのシュミードルとのモーツアルトの協奏曲の録音と、1989年のニューヨークでのドラッカーとのコーポランドの協奏曲の録音は、バーンスタインとクラリネットとの物語の最後を締め括るにふさわしいエピソードだといえるだろう。

現在、シュミードルは、バーンスタインの遺志を引き継ぎ、彼が創始した札幌の「パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF）」の首席教授兼芸術主幹を務めている。そしてシュミードルは、毎年、PMFの開会式でバーンスタインの思い出を語る。バーンスタインが述べた「平和と調和」の精神を若い世代の音楽家たちに伝えているために。

●モーツアルト: クラリネット協奏曲 イ長調 K.622

クラリネットは、18世紀になってから作り出された比較的新しい楽器で、モーツアルトが生きていた時代はまだまだ発展途上であった。モーツアルトが初めてクラリネットを聴いたのは、14歳のとき、イタリア旅行中のミラノであったといわれている。その当時、ザルツブルクにはクラリネットが存在していなかったのである。

モーツアルトが交響曲でクラリネットを使い出したのは第31番《パリ》（1778年）からであり、以後、第35番《ハフナー》、第39番、第40番（改訂版）で用いている。

モーツアルトが晩年にクラリネットを中心とする作品を手掛けるようになったきっかけは、ウィーンの宮廷楽団にいたクラリネットの名手、アントン・シュタードラーとの出会いであった。モーツアルトは彼との親交を通して、クラリネット五重奏曲（1789年）やクラリネット協奏曲（1791年）などの傑作を書き上げていった。なかでも、クラリネット協奏曲は、モーツアルトの死の2か月前に書き上げられた、彼の完成した形での最後の協奏曲であり、最晩年のモーツアルトの澄み切った境地がよく表されている。

第1楽章:アレグロ。協奏曲的ソナタ形式の定式にしたがい、オーケストラによる第1楽章の提示によって始まり、その後、独奏クラリネットがあらためて第1主題を吹く。第2主題は独奏クラリネットによって提示される息の長い旋律。深い低音から晴れやかな高音までクラリネットの魅力が見事に引き出されている楽章である。

第2楽章:アダージョ。三部形式。最晩年のモーツアルトらしい清澄な音楽。まるで天上の調べのように澄み切っている。まず独奏クラリネットが極上の美しい旋律を歌い上げる。中間部は、弦楽器の8分音符の刻みのリズムにのって少し動きの活発な音楽となる。

第3楽章:ロンド、アレグロ。独奏クラリネットの軽快なロンド主題で始まる。その軽快さは、澄んだ軽さのように感じられる。ロンド主題にはさまれて、滑らかで楽しげな副主題や駆け足を帯びた短調の副主題も現われる。

●ペーター・シュミードル（クラリネット）

1941年生まれ。父も祖父もウィーン・フィルのクラリネット奏者であった。ウィーン国立音楽大学で学び、当時のウィーン・フィルの首席奏者であったルドルフ・イエッテルに師事。65年、ウィーン国立歌劇場管弦楽團に入団。68年からウィーン・フィルのソロ・クラリネット奏者として活躍している。2001年から05年までウィーン・フィルのゼネラル・マネージャーも務めた。ウィーン国立音楽大学で後進の指導にもあたり、2000年から札幌のPMFの首席教授兼芸術主幹のポストにある。

●レナード・バーンスタイン

指揮者としてだけでなく、作曲家、ピアニスト、教育者、著述家、平和運動家として活躍した「音楽家」。1918年8月25日、米国マサチューセッツ州ローレンスに生まれた。10歳のときに伯母からピアノを譲り受け、音楽の才能を開花させる。ハーヴァード大学時代にミトロプロスから強い影響を受け、カーティス音楽院でライナーに指揮を師事。40年にはタンブルウッドでクーセヴィツキーに学ぶ。

43年8月、ニューヨーク・フィルの副指揮者となり、同年10月に急病のワルターの代役でニューヨーク・フィルにデビュー。センセーショナルな成功を収めた。44年には、ピツツバーグ響で自作の交響曲第1番《エレミア》を初演。45年から48年まではニューヨーク・シティ響の音楽監督を務める。53年にスカラ座デビュー。57年には作曲を担当したミュージカル《ウエスト・サイド・ストーリー》が大ヒットした。

57年、ニューヨーク・フィルの首席指揮者となり、58年から69年まで同フィルの音楽監督を務めた。その間、マーラーの交響曲全集の録音を進める。また、指揮、司会、台本執筆を担当した「ヤング・ピープルズ・コンサート」が大人気を博した。

66年に《ファルスタッフ》を指揮してウィーン国立歌劇場にデビュー。69年にニューヨーク・フィルの音楽監督を退任してからは、フリーの指揮者として、ウィーン・フィル、イスラエル・フィル、コンセルトヘボウ管、ニューヨーク・フィル、バイエルン放送響、サンタチエチーリア国立アカデミー管、などに客演。79年にはベルリン・フィルを指揮。作曲家としては、《オン・ザ・タウン》や《キャンディード》などのミュージカル、3つの交響曲のほか、「ミサ曲」やオペラ《静かな場所》などの大作を残す。

教育活動にも熱心に取り組み、タンブルウッド音楽祭やシュレスヴィヒ・ホルシュタイン音楽祭で後進の指導にあたるほか、90年夏には札幌でPMFを創始した。

1990年10月14日、ニューヨークの自宅で永眠。